



なごや「聖歌」だより 9月号 '08

沈黙——聴く

正教会では昔から「沈黙」あるいは「静寂」をととても大切にします。修道士たちはイイススの祈りを繰り返し唱え、「沈黙」を通して神を知ります。

現代社会は「発信する」ばかりの世界です。あちらでもこちらでも、声高に自分の要求を発言するばかりで、人の意見を受け、回りの状況に耳を傾けることが疎かになっています。今ほど足を止めて「聴く」こと、「沈黙すること」の大切さを求められている時代はないでしょう。第45聖詠には「爾等止まりて、我の神なるを識れ」（静まって、わたしこそ神であることを知れ）」とあります。騒々しさの中では神の声はかき消されてしまいます。

イギリスのカリストス主教は「沈黙すること」の大切さを教えるのに、あるラジオ番組のジョークをとりあげました。

ある人が電話をとって「もしもし」と話しかけます。「もしもし、もしもし」「もしもし、誰かいますか」「もしもし、あなたは誰ですか」と絶え間なく聞き続けます。しばらくして「話しているのはおまえだ！」と電話の向こうが答えます。「ああ、どうりで耳慣れた声だった」と受話器を置くというオチなのですが、私たちは自分の声を出すばかりで、神の声を聴いていないのでは、というたとえです。

これは聖歌を歌うときにも通じるものがあります。「聴く」ことはとても大切です。

たとえば連祷。輔祭(司祭)が何を祈願しているか聴いた上で「主、憐れめよ」と唱和しているのでしょうか。司祭が何を祈っているか聴いて「アミン(そうなりますように)」と答えているのでしょうか。

「信経」や「神の独生の子」などまっすぐに歌う部分が多い歌では、自分のペースでどンドン走って、ほかの人とバラ



バラになっていませんか。

周りの人の声だけでなく、自分がどんな声を出しているのかも聴いてみます。自分だけ気持ちよく大声で歌って、人の声をかき消していませんか。音の高さだけでなく、声の出し方も要注意です。

聖歌に限りませんが、人と共同作業を行うときには、「聴く(見る)」ことがとても大切です。「聴きながら」歌います。難しく思われるかもしれませんが、やってみればむしろ簡単です。「聴く」が先です。

聖体礼儀はリトルギア＝共に働くという意味です。互いに聴き合って初めて、息を合わせて、声の一つに心一つに歌うことができます。

ちょっと自分から離れて自分自身を見、回りに耳を澄ませ、聴き、声を合わせる注意をしてみましょう。

伝統聖歌研究会

ズナメニイ聖歌に親しむ

今月はお休み。

講義内容のまとめはインターネットで見られます。

<http://www.orthodox-jp.com/liturg>

基本的な記号の学習が終わり、それを見ながら歌う実践練習段階にはいっています。インターネットが見られない方はマリア松島までお申し出ください。実費でコピーします。

10月の指揮当番

5日 エレナ広石

26日 マリア松島

19日 ビーメン松島

聖歌練習

♪名古屋: 毎主日の聖体礼儀後に、その日気づいたこと、「聖体礼儀」の練習を中心に行います。

○10月12日代式後練習。

遠回りでも、練習するしか上達の道はありません。アルトとテノールを中心に練習したいと思います。

♪半田: 10月15日(水)11:45分頃から。

聖体礼儀を中心に練習します。ユニゾン(単音)できれいにそろえる練習をしています。3度のハーモニーやバスもつけて楽しんでます。



奉神礼の伝統シリーズ4

奉神礼と聖書

聖詠に親しむ

103聖詠（詩編）24節

（晩課の首唱聖詠）

皆智慧を以て作り

晩課の最初に歌われる103聖詠「我が霊よ、主を讃め揚げよ」は神の天地創造を讃える壮大な賛歌です。平日には全文が読まれ、主日祭日前晩の晩課では句のいくつかを選んで歌われています。句の選び方は曲によっていろいろです。

日本で一般的に歌われているものでは、

我が霊よ、主を讃め揚げよ(1)

[主や、爾は崇め讃めらる]

主我が神よ、爾は至りて大なり(1)

[主や、爾は崇め讃めらる]

爾は光栄と威厳とを被れり(2)

[主や、爾は崇め讃めらる]

山の巔(いただき)に水立つ(7)。

主よ、爾の工業(しわざ)は奇異なり(24)、

山の間には水は流る(10)、

主よ、爾の工業(しわざ)は奇異なり(24)、

皆智慧(ちえ)をもって作り(24)

[] でくくった部分は繰り返しとして付加された部分です。() は句の番号です。聖詠経と比較して見てください。

1節から4節までは神が光をまとい、天を幕のようにはり、天使を作ったことを歌います。「風を以て爾の使者となし、焔(ほのお)を以て爾の役者(えきしゃ)となす(4)」は天使を記憶する祭日のポロキメンに歌われます。

次に水と陸が分かたれ、山がそびえたち、水が流れ、谷が生まれる様子が彩り豊かに描かれます。地は豊かな実りを生じ、野生の動物や鳥をはぐくみます。家畜に草が、人には野菜、心を楽しませるぶど

う酒、油、パンが必要に応じて与えられます。木々には鳥たちが巣を作り、山や岩場にも動物が住み、海には大小の魚が泳ぎ、太陽と月が作られ、時間と季節が定められます。

聖詠作者は神の創造のわざを「爾の工業(しわざ)は奇異なり、みな智慧を以て作り」と驚嘆をこめて讃えます。

教会の一日は晩課の行われる夕刻に始まります。創世記にも「夕あり、朝あり、これ第一日なり」とあります。一日の始まりに神をたたえて歌います。

ハリストスによる救いによって、私たちは神への讃美を取り戻すことができました。私たちは神の智慧に驚嘆し、神を讃美し、世界中も私たちに唱和して歌い始めます。

「我生けるうち主に歌い、世を終わるまで我が神に歌わん。願わくは我が歌は彼に悦ばれん、我主のために楽しまん(33-4)。」

参考: 正教会訳の用語ヒント

明治時代のニコライ大主教とパウエル中井の訳は大変正確な翻訳として評価されていますが、現代では日本語の方が変わってしまっており、わかりにくくなったものや誤解を生ずるものがあります。

この聖詠のなかにもこんなものがあります。ちょっと意味を添えるとわかりやすくなります。

光を袍(ころも)の如くに衣(き)(2): マント、ちなみに司祭の着るフェロンは祭袍。

野の驢(うさぎうま)(11): ロバ、日本にはロバがいなかったため、耳の長い「うさぎのような馬」と考えた造語でしょうか。

リワンの柏香木(16): レバノン杉

松は鶴のすみか(17): 松はイトスギ、鶴はコウノトリ。

獣: 「野の諸の獣(11)」の獣は野獣、「草を獣の為に(14)」の獣は家畜をさしています。原語は区別があります。

ほかに、
「爾のしわざは奇異なり(24)」(聖詠経では「爾のしわざは多き」) 今の日本語の意味では「奇異」は普通と異なっていてあやしいことで、あまりよい意味ではありませんが、ニコライ訳では驚くべきこと(wonderful)、すばらしいこと、偉大なことを表しています。ここにはありませんが、「奇妙」も同様で、不思議ですばらしいこと、肯定的な意味で使われています。

参考資料: 『聖詠経』、口語訳聖書『詩編』、Christ in the salms Patrick Henry Reardon, Orthodox Study Bible, 正基礎講座テキスト『奉神礼』(トマス・ホブコ神父)。

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が開けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>
詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 Liturgia

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy> 奉神礼や聖歌の実践資料